

新しいグローバル時代の教員に求められる 資質・能力の育成に関する研究 — 日米協働による海外での体験型教育実践を通して —

研究代表者 小原 友行 (社会認識教育学講座)
研究分担者 深澤 清治 (英語文化教育学講座)
朝倉 淳 (初等カリキュラム開発講座)
松浦 武人 (初等カリキュラム開発講座)
松宮奈賀子 (初等カリキュラム開発講座)

I 研究の背景と目的

社会のグローバル化が新たなステージに入り、それに伴い教員に求められる資質・能力の育成も革新が求められている。グローバル教員の資質が語学力や多文化理解能力の育成だけではないことは共通に理解されているものの、その全体像や具体像は必ずしも明確にされていない。

そこで本研究では、学校間交流国際フォーラムや大学院生による海外での体験型の教育実践、およびそれらの成果や課題の分析・検討を通して、新しいグローバル時代の教員に求められる資質・能力とは何かを究明することを通して、それを育成する大学院の授業をどのように改善すればよいのかを考えるためのアイデアを発見することを目的とする。

「体験型海外教育実地研究」は、広島大学グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト研究センター(略称は GPSC)が開発し企画・実施しているプログラム(2009年度からは教職高度化プログラムの選択科目)であるが、本年度は第9回目の実施となる。本年度は、博士課程前期1年の大学院生10名【初等6名、中等4名(内、現職社会人院生1名)】、博士課程前期2年の大学院生2名【初等2名】の合計12名が参加して実施された。なお、全9回のこれまでの参加者を通算すると、89名となる。

この授業は前期の集中科目の位置づけではあるが、実際は年間を通したプログラムとなっている。具体的に本年度は、4～8月の事前の教材研究、9月18日～28日の米国での教育実地研究(ノースカロライナ州グリーンビル市内の公立のウォールコート小学校・エルムファースト小学校・C.M.エッペス中学校での授業観察および教育実習とイーストカロライナ大学での授業参加と受講学生との交流、州都ローリー市内のイクスプローリス小学校および同中学校での授業見学と校長・教員との意見交流、そして博物館を中心とした教材調査、首都ワシントン DCでの多文化理解学習のための教材調査)、そして帰国後の10～11月の事後研究による教材の完成とレポート作成、12月15日の成果発表会となっている。

また、本年度も、7月11日に開催された「新しいグローバル時代の教育～学校におけるグローバル対応の試み～」をテーマとした第11回の学校間交流国際フォーラムのために来日してもらった、実習校であるエッペス中学校のアリソン・キリー先生とイクスプローリス中学校のメレディス・チータム先生の協力を得て、7月12日に行われた授業研究ワークショップにおいて、事前の指導案検討を綿密に行った。

なお、本年度の取り組みについては、グリーンビル市の新聞社とテレビ局の取材および報道もあり、現地でも注目された。また、日本でも地元のテレビ・新聞の取材がなされた。

(小原友行*・深澤清治・朝倉 淳・松浦武人・松宮奈賀子)

Ⅱ 平成 27 年度「体験型海外教育実地研究」の概要

1. 本年度参加者の状況

(1) 全体日程

2015 年度，本授業科目の実施状況（全体日程）は以下のとおりであった。

- 4 月 7 日（火） 本授業の概要と計画説明
- 4 月 23 日（木） 授業研究テーマ事例の考察および渡航のための諸手続きの確認
- 5 月 21 日（木） 授業研究テーマ案の交流・設定
- 6 月 4 日（木） 学習指導案の検討(1)
- 6 月 11 日（木） 学習指導案の検討(2)
- 6 月 24 日（水） 学習指導案（英語版）の検討(1)
- 6 月 25 日（木） 学習指導案（英語版）の検討(2)
- 7 月 11 日（土） 第 11 回学校間交流国際フォーラム参加
- 7 月 12 日（日） 2015 年度「体験型海外教育実地研究」授業研究ワークショップ参加
- 7 月 28 日（火） 学習指導案・教材・教具の検討および渡航のための諸手続き
- 8 月 31 日（月） 準備状況の確認，教材集・報告書の作成・報告会についての確認，渡航に関する書類提出
- 9 月 14 日（月） 渡航前最終打合せ
- 9 月 18 日（金）～9 月 28 日（月） 米国における「体験型海外教育実地研究」
- 10～11 月 教材の完成とレポート作成
- 12 月 15 日（火） 「体験型海外教育実地研究」研究成果報告会

(2) 現地での日程

- 9 月 18 日（金） 広島出発，成田泊
- 9 月 19 日（土） 成田出発，米国ノースカロライナ州グリーンビル到着
- 9 月 20 日（日） 授業準備および授業打合せ
- 9 月 21 日（月） グリーンビル現地学校訪問（観察），イーストカロライナ大学教材開発センター見学，同大学学生との交流
- 9 月 22 日（火） グリーンビル現地学校訪問（授業実施）
- 9 月 23 日（水） イーストカロライナ大学の授業参加，ローリーへ移動
- 9 月 24 日（木） イクスプローリス中学校・小学校見学
- 9 月 25 日（金） ローリー市内（博物館等）研修，ワシントンへ移動
- 9 月 26 日（土） ワシントン（スミソニアン博物館等）研修
- 9 月 27 日（日） ワシントン出発，機内泊
- 9 月 28 日（月） 広島到着

(3) 参加者およびグリーンビルにおける配置

本年度の「体験型海外教育実地研究」には，前述のとおり大学院生 12 名が参加した。なお，参加大学院生の渡航費用や滞在費は全て自己負担となっている。

参加学生の現地での学校配置，担当者，参加者，引率教員は以下のとおりである。参加者は事前に準備した授業を各校において実施した。

【エルムハースト小学校 (K-5)】

実施校担当者：ワンダ・ウィリアムズ先生
 参加者：坪根沙織・中川琢磨・守谷富士彦・吉田梨声
 引率者：植田敦三・松宮奈賀子

【ウォールコーツ小学校 (K-5)】

実施校担当者：クレア・エリザベス・マックスウェル先生
 参加者：神野幸隆・谷沙織・原田啓・福岡晃子
 引率者：深澤清治・松浦武人

【C.M. エッペス中学校 (6-8)】

実施校担当者：アリソン・キリー先生
 参加者：河原洗亮・斉藤弘樹・竹内和也・山田薫
 引率者：小原友行

(4) 本年度の実施授業

平成 27 年度の「体験型海外教育実地研究」において開発・実施された授業は、表 1 のとおりである。

表 1 実施授業の学年と教科等

学生	指導学年	教科等, 題材・テーマ*
A	幼	異文化理解「子どもの日を楽しもう」 Let's enjoy Children's Day!
B	2	図画工作科「うちわに夏を描いてみよう」 Let's draw summer on "Uchiwa"!
C	2	異文化理解「盆踊りを楽しもう」 Let's enjoy Bon dance!
D	3	異文化理解「紙芝居を作ろう」 Let's make a kamishibai!
E	3	異文化理解「大漁旗にメッセージを込めて送ろう」 Let's send your message with the "Tairyobata"!
F	4	異文化理解「日米の共通点と相違点を感じてみよう」 Let's feel common and different points of between U.S. and Japan!
G	4	異文化理解「重箱におせち料理を飾ってみよう」 Let's present "Osechi ryori" in a layered box!
H	5	異文化理解「日米の学校文化について交流しよう」 Let's exchange by Japan-U.S. school culture!
I	6	異文化理解「日本のしぐさを体験しよう」 Let's experience a gesture of Japan!
J	6	異文化理解「4コママンガを作ってみよう」 Let's design "Four Cell Manga"
K	7	異文化理解「熊野筆で絵手紙を描こうーあなたの夢のメッセージ」 Let's draw the picture letter with the Kumano brush pen. -Message of your dreams-
L	8	異文化理解「未来に向けた平和の思いを体験しよう」 Let's experience peaceful visions for the future!

* 「教科等, 題材・テーマ」は、参加者（授業者）が付したものであり、授業を実施した当該校にとっては教育課程外の投げ入れ授業として位置づけられるものである。

開発された教材は、大きく次の 4 タイプに分類することができる。

【日本の文化を体験を通して理解する教材】…A,B,C,D,E,G,J,K

【日米の文化比較を促す教材】…F,H,I

【願いや思い，夢を引き出す教材】…A,E,K,L

【深い思考を促す教材】…F,H,I,J, L

(松宮奈賀子*・小原友行・深澤清治・朝倉 淳・松浦武人)

Ⅲ 平成 27 年度「体験型海外教育実地研究」参加者の自己変容

本年度の参加者 12 名の「自己の変容」についての記述内容を紹介すれば，表 2 のようになる。

表 2 2015 年度「体験型海外教育実地研究」における自己の変容

	成果と課題
A	本プログラムへ参加したことで，日本の教育しか知らなかった，日本の教育にしか目を向けていなかった自分に気付くことができた。その妨げとなっていたのは，英語力への自信の無さだろう。しかし，その苦手な英語に向き合い，授業を無事にやり遂げたこと，アメリカの先生や学生とコミュニケーションをとったことは，自分にとって大きな自信となった。伝わった時の喜びは大きく，苦手であってもジェスチャー等を使えば何とかかなると思うことができ，「やってみよう」という挑戦心まで湧いてきたことは大きな変化である。この気持ちの変化が，国際理解への一歩を踏み出したように感じている。
B	アメリカの子どもたちは授業中の反応がとても良く，授業への参加意欲も高かった。また自分が想像していたよりも，日本について興味を持ち知りたがっている子どもが多いと感じた。また自分自身に関しては，授業でなるべくジェスチャーを用いるようにしたり，普段よりも声に抑揚をつけたりするなど，言葉の壁を配慮した心掛けができたと思う。また感性豊かな子どもたちの作品に多く触れ，アメリカの美術教育について興味を持つようになった。
C	実地研究に参加するにあたって抱えていた不安というものは，実際に過ごしていく中で軽減されていったように思う。言葉の壁という不安は，動作や，表情といった非言語面での振る舞い，相手が理解してくれようとしている様子から，乗り越えることができたと感じ，盆踊りに関しても積極的に児童は踊っていたように感じている。特に，コミュニケーションの際には，気持ち次第で乗り越えることのできる要素というものが多いということ，各小中学校の先生，生徒，ECU の学生との交流等を通じて実感することができた。ECU の学生との交流の際には，同年代や同じテーマに関心がある者同士ということもあり，拙い英語ながらも笑顔を交えながら交流することができたことが印象的である。 また，アメリカで出会った多くの方の声に出して伝えるという「思いやり」の心に触れることができたことも大きな出会いであった。言葉で伝える重要性というものを意識することができたので，これを意識して実践し，将来的には私の児童・生徒に伝えていくことができればと考える。
D	体験型教育実地研究を通して，私は学校教育のあるべき姿について考えを深めるこ

	<p>とができたと感じている。本プログラムで見学させていただいたどの学校においても、全ての子どもに対して一律的な教育を教授するのではなく、個々の特性を認めた教育を行っていた。自分の学校について胸を張って語る子どもの様子や、常に子どもたちを気かけ声をかける教師の様子など、至る所でその成果を見ることができたように思う。学校教育にとって本当に大切なのは、子どもの学力を伸ばすことではなく、子どもが生きていくために必要なことを教えていくことだと考えることができた。</p>
E	<p>本授業で痛感したのは、授業の準備の大切さである。日本で授業を行う場合、言葉が通じるので授業の細かい部分まで気を遣うことは少ない。しかし、アメリカでは、言葉もうまく通じず、教室文化や学校文化も日本とは異なる。その中で、自分の伝えたいことを授業の中で子どもにどうわかってもらうか。今回は、資料や発問、活動の細部にまで目を配り準備を行った。特に留意したのは児童の実態である。小学校3年生の実態に即した授業を追究することで、子どもたちの意欲的な活動につながるということがわかった。これまで当たり前と伝わると思っていたことが伝わらないという経験したことで、伝えたいことを伝えるための授業準備の大切さを再認識させられることとなった。</p>
F	<p>アメリカで暮らす人々、先生方、子どもたちとのコミュニケーションを通して、アメリカ・日本という国と国ではなく、人と人のつながりを感じることができ、自分自身の異文化理解が深まった。英語という言語だからこそインタラクティブに会話し、一緒に笑い合えた。そのような刺激的な経験は自身の英語・外国・外国人に対する認識を変容させ、もっと外国の人と関わりたいと思えるようになった。</p>
G	<p>私はこれまでも海外渡航の経験が何度かあり、もともと外国への恐怖はあまり感じていなかった。自分の英語力には自信がなかったが、今までの経験から、英語は伝わらないなりに心は通じるだろうという予期があり、不安は少なかった。ただ、今回はアメリカの地で、英語で授業をするということで、今までにない緊張を覚えた。実際、授業をしてみて、自分より一回りも幼い子どもたちが、私のつたない英語を理解しようと必死に聞いてくれたり、積極的に交流を図ってくれたりしたことに感動した。</p> <p>日本では、自分の言葉が通じる前提で交流してしまう。そのせいで、自分の意図が相手に伝わらないことがあるとつい、相手への感謝の気持ちを忘れ、イライラしてしまったり、伝えることを諦めてしまったりしてしまう。しかし、今回、目の前の相手が自分を理解しようと一生懸命になってくれた姿を見て、自分の意図が伝わるのは相手が理解しようとしてくれたからだということに気付くことができた。日本にいと忘れがちだが、相手への感謝の気持ちや尊敬の念を持って、人と接していきたいと思う。</p>
H	<p>お互いをよく知ることから国際理解は始まる。無理解は誤解を生む。お互いの文化の違いの違いとして認め、尊重することが国際理解の土台となる。だから直接自分の目で見て触れることが大切である。私が感動したのは、ECU 大学にて教職志望の大学院生とディスカッションを行った時である。少人数のグループに分かれて日米の学校の共通点と差異について話し合った。30人程度の学生の中に、40歳を超える方が、数</p>

	<p>名在籍していた。始めは教授かなと思ったが、学生であった。セカンドキャリアとして40歳を超えてから教師になるために学んでいる。まさに学びたいときに大学に戻る社会であり、多種多様なキャリアをもった教員がいて素晴らしいと感じた。次に、普段の旅行では、お土産をあまり買わないため、帰国にむけてしだいに荷物が軽くなって行く。しかし、今回はことある事に色々な物を頂き、しだいにスーツケースが重くなっていく旅行だった。それだけ、至る所でおもてなしをされた。もっとビジネスイクなアメリカとイメージしていたが全然違った。客人をもてなすという気持ちは世界共通だと感じた。最後にチャータースクールのエクスプローリス校を訪問したことである。ないものねだりをするのではなく、ある物を最大限に有効活用していくことが大切であることを学んだ。狭い敷地を有効に活用して学校を運営していた。自分自身が世界を知り、視野が広がることで、自分自身を変容させることがグローバルマインドの変容につながった。最後に、貴重な機会を提供して下さった先生方に、感謝申し上げます。</p>
I	<p>実際に行った授業内での子どもたちや、学校の先生、泊まったホテルや店の店員など、アメリカで多くの人とのコミュニケーションがあった。話せない、聞き取れないことは多々あったが、拙い英語でもなんとか会話ができたり、授業で子どもが理解してくれたりという経験を通して、アメリカに行くまでに感じていた異国の壁のようなものは取り払われたように感じる。もちろん、英語をしっかりと話せることは大切なことであるが、気持ちやジェスチャーを通して国が違って通じ合うことができるという実感を得ることができた。</p>
J	<p>これまで自分は、コミュニケーションとは言語そのものであると考えていた。しかし、拙い英語でも表情やジェスチャー、写真などを巧みに織り交ぜることで相手に自分の思いや考えを伝えることができた場面が本実地研究中に何度もあった。その時に私は、言語はあくまで自分の思いや考えを伝えるための数ある方法のうちの1つに過ぎないということを実感することができた。</p> <p>この10日間、言語で十分に思いが伝えられないときは、話し方や表情・ジェスチャーを工夫したり、写真を見せながら話したりするなど、日本では無意識的に行っていたことに、気を遣うことを強いられた。その結果、言語に依拠しないコミュニケーション能力が向上したのではないかと考える。これは、どんな相手であってもコミュニケーションを円滑にとるために必要な能力であるといえるだろう。</p>
K	<p>熊野筆で絵てがみを描く活動を通して、生徒からなぜ日本人はこのように書きにくい筆を使うのかという質問があり、その場で答えることができなかった。現在では日本人も日常生活ではほとんど筆を使っていない。改めて伝統文化を学ぶことの重要性を感じた。書く時の姿勢はとりあえず説明したが、生徒のほとんどが足を組んで書いていた。改めて日本の文化は姿勢が根本であると感じた。</p> <p>また、日本とアメリカの中学生の「私の夢」について気づくことがあった。日本の中学生は全員が職業とつなげていないのに対して、アメリカの中学生は具体的な職業をあげており、現実的に将来を受け止めて考えていると感じた。その中で印象に残ったことは、「平和」を描いている夢の作品がいくつかあり、共通して考えていることは</p>

	<p>一緒だと感じた。</p> <p>最後に英会話ができたら、どれほど外国で楽しく充実できるかを感じる研修であった。これから勉強したいという意識が高まった。</p>
L	<p>自己の変容として、授業実施を通しての、グローバルマインドへの気づきを以下に示す。</p> <p>私は、授業で平和というテーマを通して、子どもたちと意見を交えるという試みをしてみて、グローバルに物事を考えることの第1歩は、他者と実際に話してみること、または一緒に取り組むことであると考えている。本実践を通して、子ども達が描く「peaceful visions」に触れて、アメリカの子供たちの描く平和の規模の大きさや、感覚の違いに驚かされ、また、そこから考えさせられた。立場や文化等様々異なる他人と、同じテーマに取り組むことを実際に経験し、多くの気づきを得て、その差異や気づきをさらに交流させていくことが、グローバルに物事を考える一歩だと考える。</p>

参加者による「自己の変容」の記述内容から、大きく分けて「言語と非言語によるコミュニケーション」と「国境や言語を超えた『人』としての思いやりという共通点」に関して、自己変容につながる学びがあったことが明らかになった。

多くの参加者が英語面への不安を抱えながら本体験に参加した。授業や様々な交流を通して、英語が十分でないために、児童・生徒へのコメント等ができなかったり、議論を深めることができなかったりした体験をした者も多く、言葉の重要性に改めて気づく経験となったと思われる。一方で、参加者の多くが、「気持ち」や「挑戦心」があれば、ジェスチャー等を駆使することで、何とか伝え合うことができるということも経験した。それによって、言葉は重要であるが、言葉が全てではなく、コミュニケーションを可能にするのは気持ちや心の部分も大きいことを学んだ様子が見えたと感じた。ある学生は「相手が自分（の英語）を理解しようと一生懸命になってくれた姿を見て、自分の意図が伝わるのは相手が理解しようとしてくれたからだということに気付くことができた」と記述していた。母語であっても、外国語であっても、伝わってあたりまえなのではなく、相手への意識があってこそコミュニケーションが生まれることへの大きな学びと言えるだろう。

また、現地の先生方が大変親身になって授業中もそれ以外の場面でも、参加した大学院生を支えてくださった。このような交流を通して、文化や習慣の違いはあれども、思いやりの心やもてなしの気持ちは共通しているという気づきを何人もの参加者が記していた。今後は、この学びを日本の教育現場において、次世代を担う子どもたちに伝えていくことであり、それを可能にする体験をしてきたと確信している。

本節の最後に、日本の筆文化を紹介した参加者による次の記述を紹介する。それは「(アメリカの) 生徒からなぜ日本人はこのような書きにくい筆を使うのかという質問があり、その場で答えることができなかった。」というものである。私たちは自分たちの周りにあるものを当然のものとして受け止め、そこに「なぜ」と疑問を持って考えることはなかなかできない。筆の件は一例であるが、異文化に触れることによって、また文化の異なる人との交流によって、自らが当然と思っていたことに改めて目を向け、考えることができるようになる。異文化・自文化への敏感さを養う上でも、本体験は意義深いものであったと思われる。

(松浦武人*・小原友行・深澤清治・朝倉 淳・松宮奈賀子)

IV 平成 27 年度「体験型海外教育実地研究」の成果と課題

今年で 9 年目となる「体験型海外教育実地研究」も無事、終了し、教育を通じた国際交流に大きな成果を上げることができた。冒頭で述べたように、今年の参加者は合計 12 名であった。授業構想から指導案作成・検討を含む事前研修会から、現地教員を招聘しての研修会、本実習、事後指導、報告書の執筆と、参加者の院生諸君はそれぞれの授業・演習や各自の予定を調整しながら、多くの時間をかけて誰もが未体験の海外での英語による教育実習という活動を終えて、大きな感動と自信を得たことと思われる。以下では今年度の実地研究を振り返り、来年度への研修につなげるため、今後に向けた評価と課題について述べたい。

第 1 に、今回は参加者が取り組んだテーマの多様性に進展が見られた。大学院生は各自、専門領域や問題意識が異なるため、開発された教材も大変、幅広いものとなった。日本の事情や生活・習慣について解説する、いわゆる「日本紹介型」の授業はほとんどなく、いずれも日本文化・事情を題材としながらも、そこから日米のものの見方や考え方の類似点と相違点を引き出そうとする授業が多く見られた。その中でも、広島での原爆の被害に遭った子どもたちとアメリカの教会との交流といった重たいテーマを扱ったものもあった。また、近年の日本では見られなくなったような伝統的な行事の意味づけなども扱われ、教材研究・開発において例年以上にテーマを深く掘り下げようとする意欲の表れた授業もあった。このような体験は、今後の教材開発力の涵養に資するものと言えるであろう。

第 2 に、現地の人々との英語によるコミュニケーションにおいて、参加者の積極的な態度が見られたことも、今年度の研修の大きな成果であった。日本語が全く通じない環境に初めて置かれることは、大変な不安を伴うものであるが、毎年、その不安の克服が進んでいるように感じられる。もちろん、参加者による自己研鑽の努力があつてこそ実現できたことが多いが、その背景には、現地の人々の献身的な交流や努力による支援があつたことは言うまでもない。

最後に、来年度に向けて努力を要する課題について少し触れたい。まず、アメリカ合衆国に対する諸事情の知識・理解をさらに深めていく必要がある。各院生はそれぞれ専門分野を持つため、その研究領域については豊かな知識を持っているが、それを離れた場合、たとえば、アメリカの地理、歴史、政治・経済、メディアなどの一般常識的な部分でさらに幅広い知識を持つことが、より広い地域理解につながると考えられる。特に現地の子どもたちは、生活する地域からほとんど離れたことがなく、自分を取り巻く限られた地域環境が全てであると考える傾向があり、子どもたちとのやりとりを一般化していくには、慎重な姿勢と解釈が必要であろう。

続いて、英語によるコミュニケーションのあり方について、今一度、努力を重ねることを期待したい。特に、話し言葉、スピーキングのみでなく、確かな聞き取り、リスニングが重要である。教育分野については共通する部分が多いため、ついわずかに聞いてそれを一般化して、わかったつもりになってしまうことがある。実習校での授業観察、実施について、現地の担当教員からの説明や、助言、進言などは深く傾聴すべきであろう。時に、私たちは自ら慣れ親しんだ日本の教育というフィルターを通して理解してしまう可能性もあり、しっかりと耳を傾けること、さらにはわからないことがあれば、稚拙でも構わない

ので疑問点をしっかりと押さえることは、思わぬ発見につながるであろう。「ことば」を通して教科を教える以上、日本語によるコミュニケーションスタイルの特徴をグローバルな観点から再度、捉え直す貴重なチャンスとして、この体験型海外教育実地研究が活用されることを希望したい。

(深澤清治*・小原友行・朝倉 淳・松浦武人・松宮奈賀子)

V おわりに～グローバル教員に求められる資質・能力～

新しいグローバル時代の教員に求められる資質・能力とは何であろうか。9回にわたる「体験型海外教育実地研究」を通して発見したキーワードが、「グローバルマインド」(平和を希求する精神)である。それは、平和な国際社会を実現しようとする精神や意識をベースに、その実現に向かって、次の6つの「C」を行うことができる資質・能力と定義することができよう。

◎Communication (グローバルなコミュニケーション力)

◎Collaboration (他者との協働力)

◎Critical Thinking (批判的思考力)

◎Creation (創造力)

◎Challenge (挑戦力)

◎Choice (選択力)

急速に社会のグローバル化が進展している中で、「一方が正義で他方が悪」「どちらかが勝者でどちらかが敗者」とするのではなく、多様な正義を認めどちらも勝者となれるような、パートナーとしての相互依存や相互交流の世界の実現が求められる今日、10年後、20年後という近未来の教師教育を考えると、このような「グローバルマインド」を備えた児童・生徒を育む教員の育成は、最重要な今日的課題の一つであると考えられる。

このような課題意識から、これまでにアメリカ合衆国ノースカロライナ州にあるイーストカロライナ大学のスタッフの協力を得て、小・中・高等学校の教師を対象とした日本とアメリカ合衆国の社会と文化を相互に理解し合うためのカリキュラム開発や、広島大学・大阪教育大学・鳴門教育大学とノースカロライナ州の3大学との共同研究として日米の教師によるグローバル・パートナーシップ・スクールプロジェクトを進めてきた。そして、それらの経験とネットワークを生かして、平成17年4月に多様な国際交流・国際協力の活動を展開することを通して、日米両国の教員・学生・児童生徒の相互理解と協力を促進することを目的とした「広島大学グローバル・パートナーシップ・スクール・センター」を創設する(平成20年10月には広島大学から研究プロジェクトセンターとして正式に認められる)とともに、平成18年7月に日米で教員養成に実績をもつ広島大学・大阪教育大学・鳴門教育大学とノースカロライナ州の3大学(イーストカロライナ大学・ノースカロライナ大学ウィルミントン校・ウェスタンカロライナ大学)との間で国際交流のためのコンソーシアムを締結し現在に至っている。また、同センターでは、グローバル・パートナーシップを備えた教員を養成するためのプログラムとして、米国における熟達した教員をメンターとする「体験型海外教育実地研究」を開発し、大学院教育学研究科の授業科目として実施している。

このような日米教員の協働による体験型の教育実地研究の質を高めることを通して、6

つの「C」を備えた教員を育成していくことが、グローバル時代の教員養成には求められるのではなからうか。

(小原友行*・朝倉 淳*・深澤清治・松浦武人・松宮奈賀子)

〔参考文献〕

- 1) 小原友行・深澤清治・朝倉淳・神山貴弥ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第13巻, 2007, pp. 43-56.
- 2) 小原友行・深澤清治・朝倉淳・神山貴弥ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅱ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第14巻, 2008, pp. 39-53.
- 3) 小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅲ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第16巻, 2010, pp. 95-104.
- 4) 小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅳ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第17巻, 2011, pp. 155-168.
- 5) 小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校における体験型海外教育実地研究Ⅴ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第18巻, 2012, pp. 129-140.
- 6) 小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校における体験型海外教育実地研究Ⅵ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第19巻, 2013, pp. 259-269.
- 7) 小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子・植田敦三ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅶ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第20巻, 2014, pp. 161-181.
- 8) 小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅷ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第21巻, 2015, pp. 143-161.